

わが国解剖学の父 田口和美博士

郷土の偉人《田口和美博士》



田口和美博士は、江戸時代の終わり頃に小野袋藤島に生まれました。

父親は田口順庵という医者ですが、自宅で寺子屋も開いて、学問も教えていました。

田口博士は、「日本の解剖学の父」と言われています。解剖学とは、人の体の内部を研究する学問です。病気を治すためには、どうしてそのような病気になるのか、体の中のしくみや成り立ちについてよく知る必要があります。つまり体の内部を研究する解剖学は、医者になるための基礎の部分であり、大切な学問なのです。

田口博士は14歳の時に一人で江戸に行き、外国の医学や学問を学びました。そして23歳の時に実家からそれほど遠くない栃木県佐野市で医者となりました。江戸で外国の医学を学んできた先生ということで、門の前には行列ができるほど患者が多かったそうです。

時代は江戸から明治になり、明治2年には佐野の医院を閉じて、再び東京に出ました。田口博士がかつて江戸で学んできたのはオランダの医学ですが、そのオランダ医学はドイツの医学がもとになっていたのです。

田口博士は東京でドイツ医学を学び、特に解剖学に熱心に取り組み、明治10年に東京大学医学部ができるのと日本人初の解剖学教授となったのです。当時の教え子には森鷗外や北里柴三郎などがいるそうです。

さらに明治20年には、47歳でドイツに留学し、医学博士となりました。

田口博士の演説で有名な話が残っています。「日本人男女合わせて500人の脳の重さを調べたら、男女ともにヨーロッパ人に比べて決して軽いことがわかった。体はヨーロッパ人の方が大きいから、脳の重さが同じなら体の小さい日本人の方が上である。」誰にでもわかるおもしろい話です。

田口博士は65歳で亡くなりましたが、当時の明治天皇は勲章を贈るとともに、葬儀には最高の栄誉をもってその業績を称えました。

北川辺の道の駅には、東京大学に建てられていた田口博士の胸像と同じものが、博士の生まれた藤島の実家の方を向いて建てられています。

この北川辺から『日本の解剖学の父』と呼ばれるようなすばらしい人物が出たことは、本当に誇りです。

